

平成 21 年 6 月 20 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2005～2008 年度
 課題番号：17320079
 研究課題名（和文） 学術場面での大学生の日本語使用実態の基礎的研究
 超級話し言葉コーパスの構築
 研究課題名（英文） A fundamental investigation of university students' spoken Japanese
 in collaborative learning : construction of a superior level corpus
 研究代表者 富谷玲子 (TOMIYA Reiko)
 神奈川大学・外国語学部・准教授
 研究者番号：40386818

研究成果の概要：日本人の大学生（学部生）と留学生（学部生：日本語能力試験一級取得者）の学術場面での日本語の話し言葉コーパスを構築し、その一部を公開可能な形に整えた。また、これを用いて、学術場面における大学生の行動ならびに話し言葉について分析し、協同学習における行動（言語行動・非言語行動）の特徴を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	2100000	0	2100000
2006 年度	800000	0	800000
2007 年度	700000	210000	910000
2008 年度	1100000	330000	1430000
年度			
総計	4700000	540000	5240000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：コーパス・学術場面・アカデミックスキル・超級日本語教育

1. 研究開始当初の背景

学術場面における日本語運用能力の必要性とその養成への関心は、留学生教育でも日本人対象の大学初年次教育でも非常に高い。超級日本語教育のテキストは多数出版されてきたが、いずれも基礎データの裏づけを十分

に持たないまま開発されたものであった。超級日本語教育の開発には、学術場面で実際に使われている日本語のデータを収集し、それを分析することが必要不可欠であるが、大学生の話し言葉のコーパスは研究開始当初は、利用可能な形で公開されたものがなかった。

こうした状況を打破するために、日本語母語話者と日本語非母語話者の大学生の学術場面での話し言葉のデータを収集し、コーパスを構築することとした。

2. 研究の目的

- (1) 日本人大学学部生と学部留学生（日本語能力試験一級取得者）の学術場面での日本語の話し言葉コーパスを構築し、関連する分野の研究者にも広く提供する。
- (2) 大学生の学術場面における話し言葉の特徴を分析する。特に、協同学習における行動の特徴について、言語・非言語の両面から検討する。
- (3) 分析結果を、学術場面における超級日本語能力養成のためのプログラム設計に還元するための基礎資料とする。

3. 研究の方法

(1) コーパスの設計

以下の方針を立てて、コーパスを設計した。学術場面における大学生の自発発話であること

学術場面における話し言葉であること

協同学習における三人会話と独話の両データを比較検討できること

日本語母語話者と日本語非母語話者の発話の特徴が記述可能なデータであること

同一人物の会話と独話が比較可能なデータであること

同一条件下で変数の少ない良質のデータを複数収集できること

パラ言語や非言語、環境音からの影響なども分析可能なデータであること

(2) 大学生の話し言葉データの収集

ディベートのチームを編成し、ディベートの作戦を練ることを目的とした協同学習

を実施し、協同学習における発話を録音し、音声データとする。

ディベートのチームは1チーム3名とし、日本語母語話者3名から成るチームと日本語母語話者1人と日本語非母語話者2名からなるチームを編成した。

ディベートの課題はあらかじめ設定しておき、協同学習の開始直前に提示した。ディベートの論拠となりうる同一の資料を各チームに配布し、準備状況に差が生じないように配慮し、データ収録時の条件をできる限り均一化した。

ディベート対戦は、1チーム5回のスピーチによる2チームの対戦とした。スピーチの配列は、「立論 質問 答え 反駁 まとめ」とした。この方式で、1対戦につき、2チームで10のスピーチデータを得た。対戦時間は約60分である。

対戦方法は、協同学習開始前にオリエンテーションを行って、全員が十分に理解できるよう配慮し、データ収録時の条件をできる限り均一化した。

ディベート対戦では、10名の聴衆が審判となり、採点表を用いて勝敗を決することとした。

協同学習では、チーム全体の音声を録音すると同時に、データ提供者毎の音声をも個別に録音した。個別の録音データは、言語音・パラ言語音・環境音に三分類して記述できる精度である。

ディベート対戦におけるスピーチでは、データ提供者の独話（音声）を、言語音・パラ言語音・環境音に三分類して記述できる制度で録音を行った。

以上のデータ収集を行う前に、データ提供者（大学生）全員に、研究目的を詳しく説明し、個人情報の保護、データの使用目的の理解を得た上で、文書にてデータ収集の

承諾を得た。

(3)音声資料の書き起こしシステムの開発

以下の点に留意して、書き起こしシステムを開発した。

音声と書き起こし資料とのリンク

三人会話の書き起こし資料の同時表示

パラ言語・物理音の表示

表記のゆれを抑えた書き起こし方法

パラ言語音・環境音を記述するためのタグの開発

(4)上記コーパスを用いた協同学習における大学生の話し言葉の分析

以下の観点から、協同学習における大学生の話し言葉を分析した

協同学習における談話構成の分析

協同学習における非言語行動の分析

協同学習における使用語彙の分析

4. 研究成果

(1) コーパスの設計と開発

上記 3-(1)に示した条件を満たすコーパスを設計した。スピーチ(独話)では、音声と文字を同期表示するシステムを用い、パラ言語音や環境音を同時に表示できる方式を開発した。また、パラ言語音と環境音に関しては、タグで正確に示すことができた。

協同学習における三人会話では、音声と文字を同期表示するシステムを開発することはできなかったが、時間軸に沿って、音声言語・パラ言語・環境音を同時に表示することのできる書き起こしシステムを開発した。スピーチと同様に、パラ言語音と環境音を正確に示すことができた。

(2)コーパスの公開準備

コーパスの以下の部分に関して、サンプル

を印刷媒体で公開した。また、電子データについても公開準備を完了した(ただし、一部のデータを除く)。

スピーチの発話データ

約3分の音声データ 20本

協同学習の発話データ

約60分の音声データ 8本

(このうちの3本について公開予定)

発話者のプロフィールのデータ

協同学習のための課題および資料

(3)大学生の協同学習における発話の分析

分析の結果は以下の通り。

協同学習時には、学習課題遂行過程で、学習状態を確認したり調整したりするメタ行動が頻繁に行われており、このメタ行動が協同学習遂行上重要な役割を持つ。

協同学習時には、頻繁に極端に長い沈黙が生じる。沈黙している間は、読む・書くなど、発話とは別の個人内学習が生起し、沈黙後には議論がより綿密になり深化する。協同学習では、明確な反対意見や提案の否認は回避され、賛意を示さない、新提案を行うなどの方略を用いることによって、意見の修正を行っている。

協同学習の使用語彙のうち、日本語教育能力試験のリスト外語彙(4級~1級までのリストに含まれない語彙)を調査した結果、協同学習で使用されたリスト外語彙は、テーマに深く関連する語彙と、フィラー等であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

富谷玲子・高木南欧子(2008)「協同学習に

おけるメタ認知的活動 大学生の原稿産出プロセスから」『神奈川大学言語研究』30.(pp.79-98) 神奈川大学言語研究センター

富谷玲子(2007)「学術場面における大学生の発話調整 協同学習における自然発話データから」『神奈川大学言語研究』29.(pp.85-105) 神奈川大学言語研究センター

富谷玲子・高木南欧子(2006)「コンテキストのデザイン」『神奈川大学言語研究』28. 神奈川大学言語研究センター(pp.107-124)

[学会発表](計8件)

高木南欧子・富谷玲子(2008)「学術場面における大学生の日本語運用能力の分析にむけて - 「超級話し言葉コーパス」の構築と利用 -」2008 年度日本語教育学会春季大会口頭発表(2008 年 5 月於首都大学東京)『2008 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会(pp.163 - 168)

高木南欧子(2008)「ディベート準備における大学生の発話の分析」(2008 年 7 月於韓国釜山外国語大学)『日本語教育学世界大会予稿集 2』(pp.495)

富谷玲子(2008)「協同学習における沈黙の分析 参加者の行動と学習の深化」(2008 年 7 月於韓国釜山外国語大学)『日本語教育学世界大会 予稿集 3』pp.173-175.

富谷玲子(2008)「協同学習における大学生の発話の特徴 否定の回避と意見の修正」日本語教育連絡会議口頭発表(2008 年 8 月於セルビア国ベオグラード大学)

富谷玲子(2007)「協同学習における発話の分析 大学生の発話データから」日本語教育連絡会議口頭発表(2007 年 8 月於ハンガリー国ベートーベン小学校)

富谷玲子(2007)「学術場面での超級話し言

葉コーパスの設計 - 協同学習における話し言葉の分析に向けて -」社会言語科学会第 20 回大会(2007 年 9 月於関西学院大学)『社会言語科学会第 20 回大会論文集』(pp.230-233)

高木南欧子(2006)「学術場面における多人数会話のデータ収集と分析」(ワークショップ 2 多人数インタラクションの多様性とダイナミズム 多人数会話では何が多くなるのか? -) 社会言語科学会第 18 回大会ワークショップ(2006 年 8 月於北星学園大学)『社会言語科学会第 18 回大会発表論文集』(pp.223-224)

富谷玲子(2005)「中国語母語話者のスピーチにおける語彙選択の特徴 日本語母語話者との比較から」第三回大学日本語教育国際シンポジウム(2005 年 8 月於西安交通大学)

[図書](計1件)

富谷玲子・高木南欧子(2009)「日本学術振興会平成 17~20 年度科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書 学術場面での大学生の日本語使用実態の基礎的研究 超級話し言葉コーパスの構築」

6. 研究組織

(1)研究代表者

富谷玲子 (TOMIYA Reiko)
神奈川大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40386818

(2)研究分担者

高木南欧子 (TAKAGI Naoko)
神奈川大学・外国語学部・助教
研究者番号：60409878